

# □ 合唱

## 保延裕史

最初に、2019年が記念年に当たる作曲家として90歳を迎えた湯浅譲二を挙げておきたい。1929年生まれ、作曲を独学で修得、1951年「実験工房」に参加。以後幅広い活動が国際的に評価を得て2014年に文化功労者に選ばれた。合唱の分野では「芭蕉の俳句によるプロジェクト」など独創的な作風により広く受け入れられ、本年は「声のための音楽（オトガク）」がヴォクスマーナ第42回定期演奏会（西川竜太指揮）、「おやすみなさい」がTokyoCantat（栗山文昭指揮）で取り上げられるなど祝意が寄せられた。

さて本年も国内、海外の合唱団が活発な演奏活動を繰り返した。そこで月ごとにその概要を記しておきたい。1月：東響／ヴェルディ「レクイエム」（L・ヴィオッティ指揮）東響コーラス、ヘンデル・フェスティバル・ジャパン／ヘンデル「ソロモン」（三澤寿喜指揮）キャノンズ・コンサートO&Cho、日本のうたごえ祭典70周年記念演奏会（池辺晋一郎指揮）、2月：シカゴ響／ヴェルディ「レクイエム」（R・ムーティ指揮）東京オペラシンガーズ、びわ湖ホール声楽アンサンブル「バロック声楽作品の精華」（本山秀毅指揮）、新日本フィル／ハイドン「四季」（S・イエアンニン指揮）栗友会Cho、東京混声Choいずみホール定期／相沢直人編「黒い瞳」他（高谷光信指揮）、3月：バッハ・コレギウム・ジャパン／教会カンタータ・シリーズvol.75、読響／シェーンベルク「グレの歌」（S・カンブラン指揮）新国立劇場Cho、新日本フィル／マラー・交響曲第2番「復活」（上岡敏之指揮）栗友会Cho。東京混声Cho定期／上田真樹・編「Melodies in Ravel」（委嘱初演）他（三ツ橋敬子指揮）、神戸市混声Cho春の定期（T・カリユステ指揮）、4月：東京・春・音楽祭「ベンジャミン・ブリテンの世界Ⅲ」（加藤昌則企画、指揮）ハルモニア・アンサンブル、同・合唱の芸術シリーズ・都響／シェーンベルク「グレの歌」（大野和士指揮）東京オペラシンガーズ、東京少年少女合唱隊定期（長谷川冨子、長谷川久恵指揮）、バッハ・コレギウム・ジャパン／バッハ「マタイ受難曲」（鈴木雅明指揮）、ザクセン声楽アンサンブル（M・ユング指揮）、ウィーン少年Cho、5月：TokyoCantat「やまとうたの血脈X・あの日から未来へ〜3. 11に寄せて」他、ラフォンテヴェルデ「モンテヴェルディ・マドリガーレ全曲演奏シリーズ」、東京シティフィル／プーランク「スターバト・マーテル」（高関健指揮）東京シティフィル・コア、Nコン・全日本合唱コン×東京混声合唱団（山田和樹指揮、他）、東の東京混声×西の神戸混声・神戸混声合唱団設立30年記念（山田和樹、松原千振指揮）、6月：ラトヴィア放送Cho（S・クラヴァ指揮）、タリス・スコラズ（P・フィリップス指揮）、JCDA合唱の祭典・北とびあ合唱フェスティバル、7月：国立モスクワ音楽院室内Cho（A・ソロヴィヨフ指揮）、ザ・キングズ・シンガーズ、神奈川フィル／ハイドン「天地創造」（鈴木優人指揮）バッハ・コレギウム・ジャパン、東響／リゲティ「レクイエム」（J・ノット指揮）東響コーラス、ザールブリュッケン室内Cho（G・グリユン指揮）、8月：東京混声Cho／東混八月のまつり・林光メモリアル（キハラ良尚指揮）、草津国

際アカデミー&フェスティバル／バッハとシューベルトのミサ曲（M・トルコヴィッチ指揮）草津アカデミー Cho、9月：群響／ドヴォルザーク「スターバト・マーテル」（大井剛史指揮）群響Cho、東京ユニバーサル・フィル／メンデルスゾーン・交響曲第2番「讃歌」（松岡究指揮）東京ユニフィル混声Cho、東響／ベートーヴェン・カンタータ「静かな海と楽しい航海」（R・ウィグルスワース指揮）東響コーラス、びわ湖ホール声楽アンサンブル／寺嶋陸也・合唱劇「かなしみはちからに」・宮沢賢治未来への手紙（寺嶋陸也指揮）、新日本フィル／メンデルスゾーン・交響曲第2番「讃歌」（P・マククリーシュ指揮）栗友会Cho、合唱団スコラ・カントールム／シュツ「宗教的合唱曲集」他（野中裕指揮）、神戸市混声Cho／「世界への希望・30Anniversary三善見・2台のピアノのための交響詩「海」他（藤井広樹指揮）、札幌／バッハ・カンタータ第21番他（H・ホリガー指揮）、地域創造「地域の文化芸術活動」連携プログラム「大いなる秋田」（岩村力指揮）仙台フィルと各地の合唱団、10月：ミュンヘン・ザクセン・ホール15周年記念・東響／シェーンベルク「グレの歌」（J・ノット指揮）東響コーラス、ヴォーカルアンサンブル・カペラ／ジョスカン・デ・プレ「諸聖人のミサ」他、NHK音楽祭・N響／モーツァルト「レクイエム」（T・コープマン指揮）新国立劇場Cho、レーザー・フロリサン／ヘンデル「メサイア」（W・クリスティ指揮）、東京フィル／リスト「ファウスト交響曲」（M・プレトニョフ指揮）新国立劇場Cho、11月：スウェーデン放送Cho（P・ダイクストラ指揮）、日本フィル／ラター「マニフィカト」（広上淳一指揮）日本フィル協会Cho、N響／モーツァルト「ミサ曲ハ短調」（H・プロムシュテット指揮）、大阪フィル／信時潔・交響曲「海道東征」（福島章恭指揮）大阪フィルCho、12月：東京混声Cho／池辺晋一郎「3つの不思議な仕事」他（沼尻竜典指揮）。

年間を通して、タリス・スコラズ、スウェーデン放送合唱団など芸術性が高く評価される名門合唱団や、なじみ深く親しみやすいウィーン少年合唱団などが毎年のように来日する一方、国内のプロ・アマ合唱団も活発な演奏を行った。中では大規模な管弦楽編成と独唱、合唱を必要とするシェーンベルク「グレの歌」がそれぞれ違った3組（読響・新国立劇場Cho、都響・東京オペラシンガーズ、東響・東響コーラス）と重複したことは珍しく、こうした大曲が日常的に演奏可能になったことを示す材料と言ってよいだろう。また、東京混声合唱団は関西の神戸市混声合唱団とジョイント公演を行ったほか、若手から巨匠まで多彩な指揮者による広範なプログラムを提供、企画力で斯界をリードする存在だった。古楽をレパートリーに据えた少人数のアンサンブルも着実な演奏活動を続けた。

一方で、TokyoCantatははじめアマチュア合唱団の啓発と発表の場であるフェスティバルは概ね盛況だったが、進行する高齢化の波の中で、並び称されるNHK全国学校音楽コンクール（小、中、高校生）と全日本合唱コンクール（それに加えて大学生などユース、一般社会人）の参加者減少の動向は今後の気になるところである。